

市内遺跡発掘調査

特集 鹿乗川流域遺跡群の土器



令和7年度発掘レポート

明治航空基地関連施設
木戸屋敷遺跡・木戸古城跡

鹿乗川流域遺跡群



安城市東部を流れる矢作川の支流、かのりがわ鹿乗川。この川に沿って、かのりがわりゅういきいせきぐん南北約4kmの範囲に広がる「鹿乗川流域遺跡群」。弥生時代終を最盛期とする、愛知県を代表する集落遺跡です。現在は田
航空写真：鹿乗川流域遺跡群（南上空から撮影）

安城町から木戸町まで
末期から古墳時代前期
畑となっています。

特集

遺跡群では、昭和から平成を経て令和の現在に至るまで、発掘調査が続けられています。調査では、特に弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が多く見つかっています。縦穴建物跡や旧河川、たてあな たてものあとはか墓などから、数え切れないほどの土器や木製品などが出土しています。今回は、遺跡群で最も多く出土する土器を紹介します。



や よ い ど き

弥生土器

弥生時代後期から終末期（およそ 2000 ～ 1800 年前）の土器です。
主に壺、甕、高坏の3種類があり、人々の生活に欠かせませんでした。
調理具や食器などとして使われていました。



が い ら い け い ど き

外来系土器

鹿乗川流域遺跡群を特徴づける
遺物のひとつです。



尾張、伊勢、西濃、遠江、駿河、南関東、
北陸、畿内、山陰など様々な地方の特徴
をもつ土器が出土します。これらの土器群は、
弥生時代終末期から古墳時代前期にかけ、
鹿乗川流域遺跡群がヒトやモノの交流拠点で
あったことを示しています。

じん めん も ん つ ぽ が た ど き

人面文壺形土器

弥生土器（およそ 1750 年前）に人の顔が線刻されています。
表現の精緻さは全国で確認されている人面文のなかでも
群を抜く優品で、特に入墨の表現は『魏志倭人伝』に
ある「鰐面文身」の記述と合致します。弥生時代の習俗
を表す第一級の資料として、国重要文化財に指定されて
います。



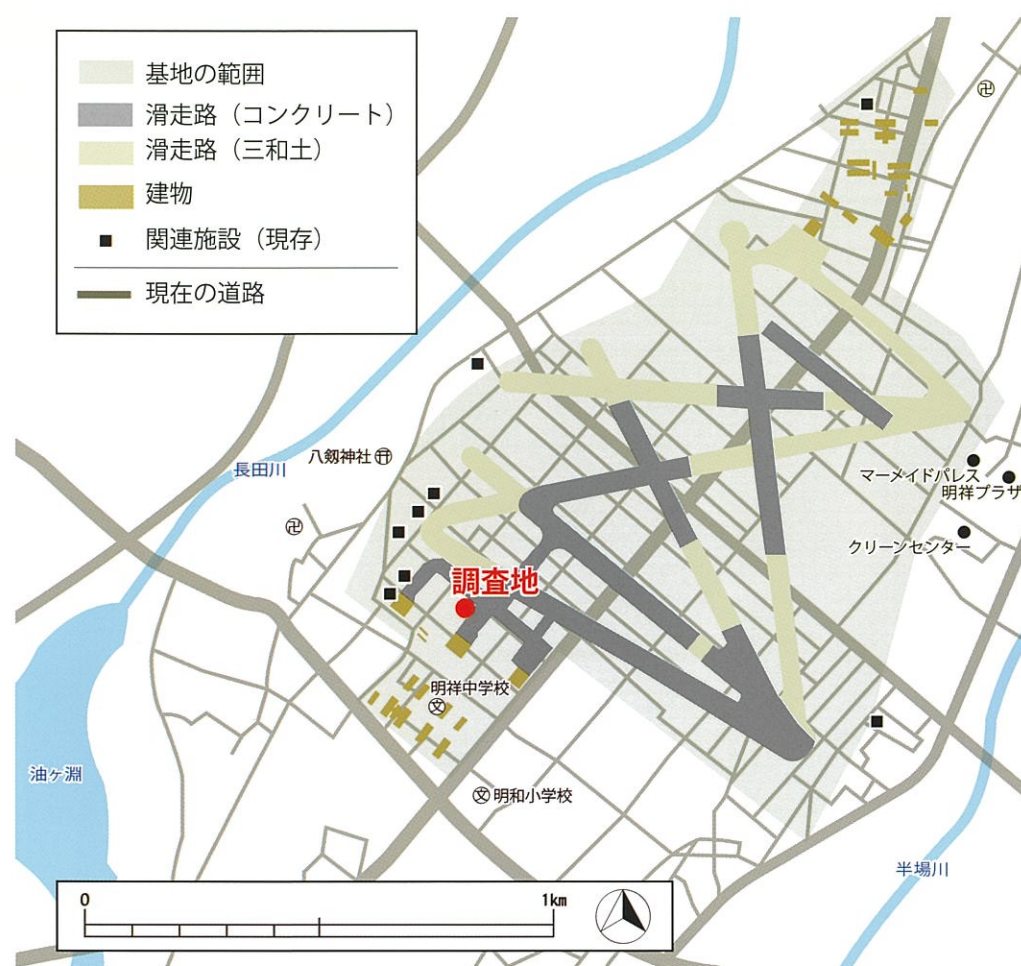
鹿乗川流域遺跡群では、このほかにも多くの線刻土器が
出土しています。

古墳時代前期（およそ 1700 年前）の土器です。
弥生土器と同じく、壺、甕、高坏があります。



土師器

これらの土器の写真は、べやんフォト・田邊朋宏氏が撮影しました。



▲ 明治航空基地 平面図

国立国会図書館蔵「明治海軍航空基地」図および米国国立公文書館蔵衆国会戦略爆撃調査資料を基に作成

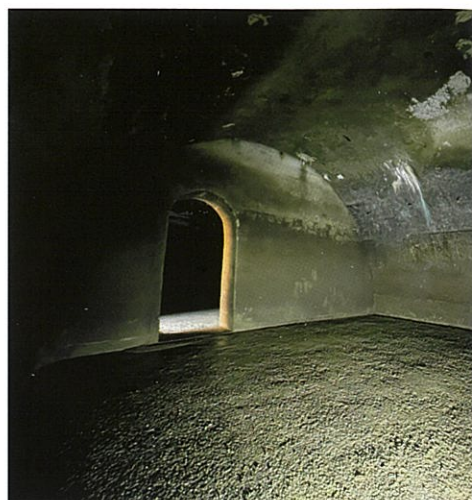
明治航空基地は、東端町、根崎町、和泉町にまたがる地域（旧碧海郡明治村）に造られた、海軍航空隊の飛行場です。昭和20年（1945）4月1日の開隊を目標として昭和18年（1943）4月8日から建設が始まりました。周辺住民や近隣の中等学校生徒も動員され、突貫工事で建設が進められました。工事中の昭和19年（1944）5月20日から、第345海軍航空隊明治派遣隊が基地の使用を開始し、同年9月15日には第210海軍航空隊が開隊しました。錬成教育が主な任務でしたが、戦局が悪化しアメリカ軍が本土に来襲すると、迎撃戦に参加するようになりました。

調査地は、東端町内の水田に残されていた土手状の高まりです。通気孔があり、一説には防空壕ではないかとされていました。内部構造を調査した結果、かまぼこ型のコンクリート構造物が4つ連結しており、壁や床には機械を設置した痕跡を確認しました。こうしたことから、単なる防空壕ではなく何かしらの設備が配置された防空施設であったと推測できます。

この施設についての具体的な史料は残っていません。しかし、「現状申告覚書 昭和20年8月8日現在 第210海軍航空隊 東海海軍航空隊明治基地隊」（国立公文書館アジア歴史資料センター蔵）という文書があり、その中に「當隊無線通信施設（耐弾）ハ送信所及自力発電所共目下工事中ニシテ八月末頃完成ノ予定」という記述があります。耐弾式防空施設で現在残る他の基地関連施設に当てはまるものがなく、今回確認した①の機械痕跡が発電用のものである可能性が高いことから、この施設は「送信所及自力発電所」の可能性がります。



▲ 調査地（北から）



▲ ②（南西から）



▲ ③（南西から）

かいぐんこうくうたい ひこうじょう



▲ 内部構造平面図



▲ 外部構造（西から）

外部はコンクリートの表面にコールタールを塗って防水加工しています。さらに長七たたき、三和土で外部を覆っています。コンクリートと三和土の厚さは、天井部で合計1.4m（残存、三和土の一部は流失。コンクリート厚は0.9m）になり、堅牢に造られたことがわかります。

内部は4室に分かれ、全体はL字型となっています。室内の高さはいずれも約2.7mです。天井の厚さは約0.9mあることから耐弾式防空施設として建設されたことがわかります。各部屋の壁際には溝があり、それぞれ出入口の床に設けられた集水枡につながっています。

▲ 集水枡（西から）
壁には薄い木板が貼られています。

自力発電所？

出入口

①

②

③

④

送信所？

出入口（未掘）



▲ 長七たたき（人造石）

明治時代に、碧南の服部長七により発明された、水中でも固まる三和土です。明治用水頭首工（豊田市）などに施工されています。ツルハシや電動工具もはじかれるほど堅固です。

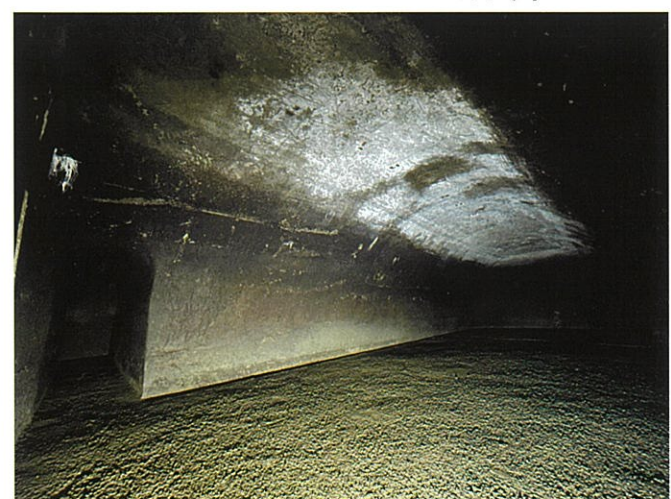
▲ ① 機械の痕跡（南から）
壁から太いケーブルが伸びたままになっています。床には機械を固定したボルトや穴が残っています。

▲ ①（南西から）



▲ 天井に取り付けられた碍子

がいし 碍子は、電気を絶縁して配電線を支える器具（磁器）です。碍子に配電線を巻きつけて、線が垂れないようにします。どの部屋にも複数の碍子が取り付けられており、施設全体に配電した様子がうかがえます。



▲ ④（南西から）

木戸屋敷遺跡・木戸古城跡

木戸町

調査期間：令和8年1月8日～23日

木戸屋敷遺跡・木戸古城跡は、碧海台地上、木戸町春日神社の北に位置する集落および城館跡です。地籍図には堀または土塁とみられる区画が認められ、調査地はその東側に当たります。戦後まで堀が埋まらずに存在し、堀に沿って南北には土塁が残っていたといえます。

調査の結果、堀と、土塁の痕跡とみられる数条の浅い溝を確認しました。堀の下層から戦国期の鍋などが大量に出土したことから、堀は戦国期には存在したことがわかりました。また堀が途切れている部分があり、そこには細く浅い溝がつながっています。この箇所が、堀で囲った屋敷地への出入り口であった可能性が高いです。周辺の柱穴は、門などが建っていた可能性があります。



▲ 完掘（南西から）

堀の下層から出土した戦国期の遺物 ▶
鍋や釜、茶碗や皿などが出土しました。



▲ 地籍図でみる木戸古城跡（推定）
『櫻井村土地実典』（昭和10年）に加筆



安城市には、現在250カ所以上の遺跡が残されていることをご存知でしょうか？遺跡は、先人たちが辿ってきた郷土の歴史を知る上で欠かせない、貴重な財産です。後世に残していくことが最も望ましいですが、住宅建設や道路整備などにより、私たちの生活の中で、やむを得ず壊されてしまうことも少なくありません。安城市では、遺跡が壊されてしまう前に、文化財保護法に基づき先人たちが遺した遺跡を図面や写真等で記録・保存するための「発掘調査」を行っています。

令和7年度は、試掘・確認調査12件、発掘調査2件を行いました。調査を通して、私たちの先人の足跡を知っていただければ幸いです。

安城市埋蔵文化財センター 〒446-0026 安城市安城町城堀 30 番地 TEL 0566-77-4477 FAX 0566-77-6600

このパンフレットは、令和8年度「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」として、文化庁より補助金を受け作成しました。